

在日朝鮮人子弟の教育

在日朝鮮人子弟の教育

天龍村史より

戦前の三信鉄道建設工事（^{昭和4年ねん}1929年8月着工^{昭和12年ねん}1937年8月完成）、また、その後の平岡ダム工事に関わり、^{昭和10年ねん}1935年～敗戦にかけて、当地域には多くの朝鮮人労働者が流入し、居住していた。

彼らのほとんどは、三信鉄道建設の頃には「募集」に応じて、また平岡ダム工事初期の頃には「官斡旋」、その後「徴用」という名目の強制連行も加わって、当地に来た人達であった。

この中の「募集」とは、日韓併合による土地調査事業によって国に土地を取り上げられ、生活基盤を失った朝鮮半島の農民達が、家族を連れて新たな職場を求め日本の労働者確保のための募集に応じ、後に「自由渡航者」と呼ばれる人達であった。彼らの子弟は赴任先地域の学校に編入することとなった。

昭和20年5月9日現在、平岡小学校には全学年で90名が在籍していた。この数字には、学校に行っていない児童、日本名を名乗っていた児童は含まれて居ない、実際はそれ以上の児童が平岡地区に居たことは間違いない。

全ての朝鮮人児童が学校に行けた訳でもなく、行けたとしても、その授業内容は日本人児童の内容と変わりなく、日本語での授業、教育勅語の理念、また勤労奉仕にかり出され行軍を行う姿は、日韓併合、強制連行などの憂き目にあい、「そんなことをした日本の為に兵士となって、戦場に行かなければならないのか、そんな馬鹿げた話があるか」と激しい怒りを感じていた。

学校に通わせることが出来ない悲しみ、通わせたとしても、朝鮮人としての教育を受けさせることが出来ない憤り、その感情が敗戦直後に民族教育を受けさせる場として、満島朝鮮人学校の設立につながった。

終戦後、多くの朝鮮人は祖国へ帰国したが、その一方で日本に留まることを選択した人達も少なからずいた、その理由は後述する。

村在住朝鮮人

昭和20年12月 140世帯 男537名 女140名 計677名

22年8月 男111名 女107名 計218名

昭和21年5月在日朝鮮人連名平岡分会が中心となり、朝鮮人の子弟達に朝鮮人としての教育を学ばせる為、満島朝鮮人学校を設立した。

学び舎は当初は民家を間借りし、その後現役場庁舎前に校舎を新築し、教師は曲

がりなりにも読書が出来る大人2名が担い、男子31名、女子34名の児童の教鞭をとった。

設立当初は生徒の年齢を考慮せず、朝鮮人としての教育を何も学んだことのない生徒達には全員1から学ばせる為、児童は全て1年生として就学させた。昭和23年には翌年からのダム工事再開の流れもあってか、朝鮮人全体で335人の居住者が報告されているのだが、その内訳を見ると「学生、生徒167人」と記されている。

参照「決議文」

昭和22年冬、下伊那在住の朝鮮人たちは、平岡村役場に1通の決議文を提出している。

「在日朝鮮人は、日本軍国者共が敢行した侵略戦争当時徴用と言う暴力手段によって拉致されて来たか、そうでなかったら悪逆無頼の暴圧と搾取のために、一切の生活力を強奪され、生きるに途なくして一片のパンを求めて日本の労働市場に買われてきたものであるために、祖国に何等の生活根據おも、持たないのである。此が我々が過去長い間、夢にも忘れることのなかった解放が訪れた今日尚、祖国に帰れないで日本に残留して居る理由である。申て日本に残留する朝鮮人の生活問題解決には、全的に日本当局に、其の責任があるべきである。

しかるに、今日迄日本当局は、朝鮮人に対して何等対策をも樹ってないし又、樹てようもしない。

それだけではない。

我々が過去一切の行懸を水に流して、朝日両国民間の友好親善関係の、橋渡しになることを期して、日本の人民と緊密な提携協力を為すために、日夜努力している我々の試みを妨害し、自らの失政とインフレの責任を我々朝鮮人に転嫁しようと策動し両民族を離間し対立抗争せしめようとして煽動している。

即ち最近顕著となった我々に対する、不法弾圧並びに朝鮮から引揚げてきた、もと植民地の戦犯官吏が警察署、検察庁や、裁判所等に、就職して、昔に変わらぬ偏見と屈辱と敵意に満ちた暴言が露骨に、しかも公然と行われていることは、その一例である。

此の様に、日本の指導者が過去長い間我々朝鮮民族に対して加えた、非人間的な野獣にも劣る行為を、少しも反省せずポツダム宣言の実施をさぼり占領軍当局の朝鮮人に対する好意を妬み、朝鮮人を厄介視し、却って朝鮮民族が解放された

ことを口惜しく残念に思い、朝鮮人に対して復讐感すらをも持っていると言う事実に対して、我々は、限りなき憤激を感じるものである。

以上の事情に照り合せて、左の各項を決議して、之が貫徹を期するものである。

- 1、日本人民と相提携協力し幸福を築き上げて、世界平和と民主主義確立のために、努力している我々の活動に協力せよ。
- 1、朝鮮人に対する為にする為の干渉と弾圧を中止せよ。
- 1、朝鮮人の生活解決の具体的対策を樹よ。
- 1、朝鮮人を一般引き揚げ者と同様に処遇せよ。
- 1、朝鮮人に仕事を与えよ。
- 1、旧植民地から引き揚げた戦犯的官吏を即時罷免せよ。

1947年12月7日

長野県下伊那郡在住

朝鮮人生活危機打開人民大会

代表 方 太石

平岡村村長殿

たとえ偏見や屈辱を感じ、場合によっては干渉、弾圧を被りながらも、彼らにはこの土地での生活を豊かにする以外に途は無く、そこにこそ、なにを差し置いても、教育の場を設けようとする、彼ら自身の強い動機があった。

貧困のさなかに親たちは独力で学校をつくり、児童達は空腹を抱えながらそこに通った。そうでなかったら「子供達は無学のまま育ってしまい、また自分達のように、つらい思いをする」と言う、切実な危機感の表れであり、当時の満島朝鮮人学校の存在とは、子弟らに祖国の言葉、祖国の文化を教えたいと願う在日朝鮮人たちにとっての、いわば苦難と希望の結晶であった。

昭和21年5月	朝鮮人学校設立 民家を間借り、その後新築校舎に移転
22年3月	文部省通達により、朝鮮人学校の設立、運営が公認される 役場の調査によると、生徒数 男子31名、女子34名
23年1月	文部省は一転して通達により、朝鮮人学校の設立、運営を 不承認とした。

「朝鮮人の子弟であっても、年齢に該当する者は日本人と同じ市町

村立または私立の小学校あるいは中学校に就学させなければならない」

- * 理由としては、国内的に民主化運動の激化、さらに国際的には朝鮮半島情勢の緊張と言う、当時の政治的社会的状況に対応したGHQならびに日本政府当局による、民族教育への圧迫であった。

23年10月19日 朝鮮人学校閉鎖

その後児童、生徒たちは平岡小学校、平岡中学校への編入を余儀なくされることとなった。

昭和27年

1952年の平岡ダムの完成に加え、後の佐久間ダム補償金問題が一段落するのをきっかけに、多くの在日朝鮮人がこの地を離村していった。その後も地域全体の人口低下に比例するように、彼らの人数もまた暫時的に減少していくが、それでもなお30年当時には、神原村、平岡村の双方合せて150名、その10年後でも74名もの朝鮮籍、韓国籍を有する人々が、依然この土地での暮らしを選択していた。

平岡中学教師の回顧

昭和30年の着任から8年間同校に勤続したある教師は、後に「平岡には朝鮮人の人達が大勢いて、中学校へも大勢来ていた。おそらく下伊那の中学校では一番多かったろう」と語り、「土地の人々の中に朝鮮の人もとけ合って親しくしていた関係からだろうが、生徒間に朝鮮人だからといって差別すということもなく、実にうれしく思っていた」として、ありし日のよき思い出を回顧している。

けれども一方で彼は、次のようにも記していた。

「この生徒たちが一度卒業して就職するとか、結婚という社会生活に入るとそこには厚いカベがあって、これは容易に破ることができなかった。この冷たい現実には私達教師にとっては許せない不条理であった。このため苦しみ、涙を流した卒業生を私は知っているが、いつになったら偏見のない国際融和が実現することであろう」



朝鮮人強制連行、強制労働の記録

「戦争を掘る」からの抜粋

朝鮮人強制連行、強制労働の記録 「戦争を掘る」からの抜粋

P 2 3 強制連行、強制労働がはじまるのは十五戦争末期、丁度中国人を強制連行し始めたころとかさなる。

日本書籍版の高校地理Bに次のような韓国併合以後の在日朝鮮人の推移統計がある、これを見ると1935年約62万人だったのが、1940年には急に上昇119万人、43年188万人、45年敗戦の年は236万人になっている、そして46年敗戦後の在日人、韓国人は65万人程に急減している。

年次	在日朝鮮人数
1904	229名
1915	3,889名
1920	30,175名
1923	80,617名
1930	298,091名
1935	625,678名
1940	1,190,444名
1943	1,882,456名
1945	2,365,263名
1946	約650,000名

この45年の数と戦後の数の差約175万人が強制連行された数と推測できる。

P 3 6

熊谷 (平岡)	中国	1,083名 (62名死亡)
	ダム 発電所建設	
強制收容 同上	連合国 (13カ国)	(米93名 英215名)
同上	朝鮮	2,000~4,000名 (死亡59名)
熊谷 (遠山)	朝鮮	200~
	隧道掘削	

P 3 7

1. 県内における加害があったと思われる場所は、県内全域20近い事業場にのぼり、該当外国人は朝鮮人2万5千人を最高に、中国人約4千人、連合国兵4百余名と推察される。
2. 加害は、強制連行による強制労働が大部分であるが、在日敵国人を理由の迫害、また朝鮮の婦女子を連行して「慰安婦」として虐待した例もきかれる。

3. 強制労働までの経過にも形態はさまざまであるが、朝鮮人の場合、二つに大別できる。
一つは、日本の朝鮮植民地化以降渡日して、徴用で強制労働現場に連れてこられたのと、朝鮮から直接連行されたものとの二つである。直接の場合は、朝鮮の各面（村）に人数を割り当て、その数にあわせて本人の意思は無視、無理やり連れてこられた。
4. 朝鮮人、中国人以外の外国人の場合、戦場で捕虜になった兵士を連行する場合がすべてとあってよい。
5. 迫害については詳細は解明されていないが、避暑に来るか別荘を所有する欧米人、または他の土地に移住する欧米人を集めて監禁したり、特にキリスト教会（徒）にはいやがらせをする。
6. 殉難者の数は数百名にのぼると推定されるが、中国人をのぞいてはその数は判明していない。
中国人の場合は請負会社に記録が残っていてそれによりほぼ数字を推定することが出来る。
その他については記録がみあたらず、多分戦争責任をのがれるために大部分証拠書類は焼却された可能性が大きい。
7. 殉難者の遺体の処置についてもまちまちだが、野天で焼却したのはいい方で、大部分は、山にすて、沢に穴を掘って埋めた。そのため水害などで白骨化した遺骸が下流に流され、一人の骨か複数の骨かさえ見分けがつかず、遺骨収集は不可能に近い状態にある。またどこに埋めたかが定かでないものも多く、発掘さえ出来ない。特に朝鮮人犠牲者の場合はいまだ一体も見つかっていない。平岡や木曾谷で収集された人骨は幾体もの骨がまじりあい、中国に送還されており、「混骨」とか「靈砂」として送りどけられた。誰の骨かも、朝鮮人か中国人かの区別もつかなかったための便法からする呼び方であった。
- 8.
- 9.
- 10.

P 4 4

戦前の長野懸在住朝鮮人の労働と生活

長野懸在住朝鮮人の労働と生活は、植民地化された朝鮮人が直接強制連行ではないけれども、その土地と家族を奪われて日本に生活を求めてきた実態であるし、また日本の労働者の低賃金をさらに下回る低賃金を求めて、連れてこられたものであり、戦時下の強制連行、強制労働に集中される前段の問題として、押さえておくべきものとして、ここにとりあげたのである。

とはいうものの、ここで引用しているものはほとんど官庁史料であるという制約をもっている。

この調査はまだほんの糸口に過ぎないことを示しているが、ここから出発しなければならぬ現状としてご了承いただきたい。その意味で覚書である。

1 大正期の労働と生活

(1) 製糸労働者として

まず大正期において、朝鮮人で長野県に労働に来て在住しているのは、諏訪地方を中心とした女子製糸労働者である。大正前期にはまだ殆どみられなかったのが(1921年「長野県統計書」では8人とある)、1925年(大正14年)には250人翌26年6月には442人、となっている。中略

朝鮮人労働者を雇うようになったのは、1920年(大正9年)の戦後恐慌以後中小工場は経営に打撃をうけ、職工を雇うのが困難であったので、諏訪郡川岸村の山崎製糸場がかって紡績女工であった朝鮮人を試験的に雇ったのが最初である。これが「指導如何に依っては意外の好成績を収め得たるを以て引き続き増員を行ひ稼働せしめたるに、之を伝え聞き」諏訪、東筑摩、上伊那各郡地方の二流以下の事業家がすすんで、朝鮮より婦女を雇い入れた、というのである。

さらに朝鮮人労働者は「郷地を離れ遠隔の地に居る事とて内地付近より編入せる女工の如く何等かの事端を構え時々帰宅し、又は年々編入契約をなすため多大の失費を要せず、一旦雇用すれば比較的永続し使役せらるる」という工場主からみての利点があった、というのである。

また能率は、最初は言語の日自由や繊細な技術などで糸質が劣悪であるが、熟練すれば「内地女工」の中位にはなるとみていた。

「内地語」に通じる朝鮮人男子が彼女たちの監督となる場合があり、監督は工場主とことをかまえて、彼女たちを引き連れて他の工場へ転じゆるような行動をするので、工場主は注意を怠らなかつた。

また寄宿舎では、朝鮮人女子と日本人女子を別室とするところもあったが、反目抗争は少なかったという。

(2) 土木建築労働者として

1923年(大正12年)9月の関東大震災後、日本政府の朝鮮人内地渡航制限により在住人数は減ったが、その後渡航証明書の廃止とともに再び増加した。長野県在住の朝鮮人総数は、季節によって大きな変化があった、1925年(大正14年)6月末現在3295人が、同年12月末現在1640人と減少している。このように夏期と冬期との時期的な変化は、土木工事労働者が圧倒的に多かったからである、発電、軌道工事等は、厳寒には事業を縮小または休止するので、彼ら

は温暖地方へ移り、また農蚕家も年内通して雇わないので、労働者は帰郷または他府県へ移動するからであった。

長野県では、工事現場で朝鮮人を大規模に雇うようになったのは、1921～23年（大正10～12）西筑摩郡木曾川流域の大同電力株式会社による発電工事からで、盛時5千人を数えた。1924年～25年には、南北安曇、南北佐久、下高井の各郡地方に水力発電工事が勃興した。また下水内郡の飯山鉄道、上高井郡の河東鉄道、長野市～須坂町間の長野電気鉄道等の軌道工事が起こり、朝鮮人土工が蝟集した。1926年（昭和元年）には小県郡神川村の丸子鉄道延長工事、下伊那郡上飯田村～松尾村の伊那電気鉄道株式会社電車軌道延長、下高井郡平穏村地籍の長野電気鉄道株式会社の軌道工事、南佐久郡栄村地籍ならびに北佐久郡高瀬村～川辺村地籍の千曲電力株式会社発電工事、上水内郡信濃尻村信濃電気株式会社発電工事、其の他南安曇郡安曇村島々地籍京浜電力株式会社発電工事等が規模の大きなものであった。朝鮮人は各地より転入し、さらに県下各地に河川の護岸工事、道路改修工事等が起業されると、「朝鮮労働者の影を認めざる所なき位、彼等はその稼働の領域を拡大し、季節的に信州は労働朝鮮人の憧憬地たるの観あり」という状況であった。

(3) その他の労働者

このほか日本人労働者が不足した場合、これを補てんするために朝鮮人を農蚕業に雇う場合があった。

また製材工場、鉄工所、紡績工場、綿打工場、湯場に雇われるもの、貨物運搬夫、商店雇い人、人力車輓子、一戸を構えて日雇い稼ぎをする者、特殊な者として警察署子使い一人、郵便局集配人二人、自動車運転手五人等があった。

以上まとめると、朝鮮人労働者の場合、製糸労働者は日本人女子労働者とほぼ同程度の技術を身につけながら、工場主にとって利点があり、日本人労働者を補てんするものであった。

また男子労働者は、危険で重労働の水力発電工事、電車軌道工事、河川改修工事などに従事することをもって、辛うじて雇われるのであり、さらに季節的不安定な面ももっていた。其の他の労働も、概して雑業かそれにちかいものであったのである。

P 5 0

工事現場、飯場生活の実態

官憲側史料 1927年（昭和2年）

生活状態

発電工事の如きは多く人家より隔たりたる山間辺鄙の地なるを以て、彼らは工事上付近にいわゆる、飯場なるものをバラック建てとし、

これに飯場頭と手内地の事情に通じ多少事理を弁ずるもの配下数人乃至2、30を一団とし寝食せしめ、現場においても自己が全ての指揮者となり稼動しつあり、又、人家点在する地方に於ける工事現場に於いては、人家を借り受け、前述の如き飯場頭首領となり、配下を統率して生活しつつあるも、何れに於いても内地労働者と雑居するを避け居る模様なり。

而して飯場頭は配下より食費として一日金七十銭乃至七十五銭、及び世話費として一日十五銭乃至二十五銭を日給より控除し居り為に飯場頭は自己の労分と配下の刎ね銭とに依り裕福なる生活を送るものあり、彼等の飯場に於ける日常生活は実に簡素ににして、副食物の如き一汁主義を採るも概して内地人に比し大食なる為、飯場頭に徴収さるる食費も内地労務者より一日二十銭位高額なり、尚、衣服に居たりても大部分は着替えを持たずシャツと半股引と素足、足袋位の軽装にて、冬季は之に粗末なる防寒衣をまとう位なるか、其の身を持する不潔にして風呂の設備をなすも15日乃至20日に一回入浴するは上の部にして、甚だしきは2ヶ月に亘るも入浴せざるものもあり模様なる為、入浴により終日の労苦を一洗せんとするの習慣ある内地人とは総て其の習性を異にするを以って、飯場に於いて雑居は双方ともに之を好まざる模様なり。

工事現場に於ける賃金

賃金は各種の業態により差異あるも、発電工事場に於いては普通1円80銭、軌道工事場に於いては1円70銭にして、その中より食費並びに世話費を控除せらるるものなり。

工事場就労者の勉否並びに嗜好

各飯場居住労働者は只、黙々として眼前に於かれたる業務に就き居るに過ぎずして、勤勉以って自己の運命を展開せむとするの、概に乏しく、概して怠惰にして監督眼薄ければ忽ち惰眠を貪るも、常に相当監督の上就労を督励せば天性の頑健と忍従の両点を捉え得て、業態によりては内地人を凌駕するの能率を挙げると、給与もやや低廉にて雇用し得らるる関係上近時各種工事上に於いては朝鮮人労働者を需むるの益多き傾向あり、而して彼ら労働者は趣味に乏しく、只強烈なるタバコと酒とを好みタバコ代の如き、日に二十五銭乃至二〇銭を費やし、其の余りを酒代に費やしあり、天涯を友として流転するの徒輩多かりしか、最近この種のもの暫時影を潜め相当蓄財し郷里へ送金するもの多し。

P 6 9

満島俘虜収容所について

満島俘虜収容所(正式には東京俘虜収容所第二派遣所)は1942年(昭和17年)に設置された。

場所は平岡発電所の対岸で、現在天竜中学校の校庭の一部となっている
此処へは米英を中心とする連合軍俘虜が常時200~300人収容されてダム工事関係の仕事をさせられていた、この収容所で死者が47名(45名)出たため戦後、BC級戦犯を裁く横浜裁判で厳しい判決を受けた、裁判では「虐待の結果死亡」とされたがそれだけではなく、フィリピンでの「死のパターン行進」の後日本に送られた兵士たちは既に栄養失調やマラリア、皮膚病等により全員が衰弱していたことに加え、1944年(昭和19年)は例年になく寒気の強い冬だったことも影響したと考えられる、しかし横浜裁判では初期の所長、中島裕雄大尉(長野県出身)を含め6名が私刑、4名が無期となった、横浜での裁判が満島収容所の職員から始まったこと、また処刑も最初に執行されたこと等を見ると、連合国側がいかにこの満島収容所での虐待行為を重視していたかが伝わってくる。

しかし、此の中にあつて、敗戦直後俘虜が帰国する時に、一通のメモを渡された西野洋吉氏は戦犯に問われることはなかった、俘虜多数のサインがあるこのメモは「関係者各位」宛てに「彼(西野氏)は俘虜に対していつも親切で思いやりがあり、決して私達の物をとることなく、又決して暴力をふるわなかった」と英文で証言しており、予想された戦犯追及が及ばないように配慮したものだった。(西野氏は1959年列車事故で亡くなった)多くの私刑者の中には、この村の出身者もおり、また、俘虜収容所の職員は厳しく俘虜虐待の罪を追求されたにもかかわらず、同様に多数の死者を出した中国人(俘虜)関係の職員には戦犯追及が何もなされなかったことが、複雑な村民感情として地元にも未だ影を落としているようである。

P146

朝鮮人該当者の証言(平岡に関係のみ抜粋)

在日朝鮮人 S、I 氏

私は関東大震災の年、14歳で単身職を求めて日本に渡り、北九州、大阪、東京を流浪の身同様に渡り歩いた、たまたま関東大震災にあい、あの朝鮮人大虐殺の渦中になげこまれた、あやうく難をのがれ、東京を抜け出して北九州に逃げ、一時ここで乞食同様の生活をしていたがまもなく故郷朝鮮にまい戻った、しかし、朝鮮はますます住みにくくなっていて、昭和のはじめ、弟と二人で再度日本へ渡った、しかし前回同様まともな職につくことができず、各地のダム工事、トンネル、鉄道、鉱山などの土方仕事をしながら転々と職を求めて歩いた、九州、静岡、名古屋、満島そして戦争の末期里山辺の地下工場建設のために、弟も一緒に、強制労働に従事した、満島では朝鮮人の外に中国人、アメリカ兵数百人が連行され、トンネルやダム工事に強制労働させられ沢山の犠牲者がでた、処置に困った工事関係者は遺体を野天で焼却し、そのまま埋めたり、時には骨を集め

てまるでゴミでも捨てるように天竜川に投げ捨てるのを見たこともある、全くひどかった。

在日朝鮮人 I、K 氏

私は昭和8年18歳で日本に来た、兄が先にきていた名古屋の陶器工場で8年ほど働いていたが、戦争が始まったころ、富山の黒部ダム建設現場で働いた、私たちは「旅の人」とよばれた、二人で一本の土管を運んだ、中国人やアメリカ人も連れてきていて、運ぶ距離が決まっていて、途中で休んだりすると監督が棒でなぐった、黒部から満島にかわり、さらに伊那の遠山にまわされた、ここでは2年ほど働かされた、仕事はダムに水を通す水道管の隧道を掘る仕事であった、朝鮮から直接連行された者もいて、仕事がきつく逃げ出す者もいた、つかまると、村の人達になぐらせた、そのあと憲兵が目から火がでるほど強くはたいた、松本の里山辺の工事場へは昭和20年の3月ごろまわされてきた、丁度そのころ山辺に爆弾がおとされ、そのため工事が急がれ、それだけ仕事がきつくなった、逃げ出す者もいた、ここでは、捕まると朝鮮人同士をならばせて、お互いに力一杯の制裁を交互に加えさせた、とにかく話にもできないくらいひどかった。

P 1 8 7

拍 斗権氏からの聞き取り調査 (1986年1月6日)

在日韓国人、朝鮮人で当時の様子を知っている人はいないか調べていくうちに、平岡に在住していた朴斗権氏の名前がでてきた、ところが、朴氏は現在は平岡からはなれ、松本市郊外の梓川村に移り住んでいた、そこで1986年(昭和61年)1月6日に梓川村の朴氏を訪ね聞き取り調査をした、朴氏は1910年(明治43年)生まれ、訪問時75才、50年以上も平岡に在住していた、朴氏は快く若い時からの苦労のようすを淡々と語ってくれた。

朴斗権は「日韓併合」が強行された1910年、朝鮮慶尚北道慶山郡の農家の末っ子として生まれ、父は1才半の時に亡くなった、斗権が20歳のころ、朝鮮の7割がたは「土地調査令」によって日本人のものとなっていた、昔朝鮮では「1年豊作になれば、2年は何もしなくてよい」と言われるほど豊かだったが日本の植民地になってからは税金もはらえなくなった人々が多くいた。

家が貧しく学校へ行くことも出来なかった斗権は、20歳の時に先に来ていた兄を頼りに日本へ渡った、栃木県、茨城県、三河川合へ来て、三信鉄道(現在の飯田線)の工事にあたった、当時6百人~7百人の朝鮮労働者があり、1日につき1円50銭の日当だったが、3ヶ月も賃金をくれなかった、8月にストライキがおきて警察に検束された、岡崎へ連行されて拷問を受けた、敷居の上に正座させられ、膝の裏に竹の棒を入れさせられたり、手の指の股に棒を挟ませて指を締め付けられた、結局賃金は1割引

きで支給された、当時日当が1円50銭で、飯代は70銭であった、雨の日は収入がないので借金がふえていくしくみだった。

1933年(昭和8年)泰阜の門島ダム工事へ来た、門島には2千人~3千人の朝鮮人がいた、日本人は主に世話やきや監督で、工夫として働いている者は1割もいなかった、労働組合もあって、地下にもぐって活動している人もいて、夜日本語の学習会もあって若い人で勉強している人たちもいたが、疲れてしまっただけで出ることにはできなかった、眠ったと思えば朝、そんな毎日だった。

朝鮮人はほとんど、ボス(日本人)によって強制的に連れてこられた人たちだった、ボスは朝鮮に行き警察に頼んで人を集める、朝鮮の警察や役場は協力しなくてはならないようになっていた、門島では1日2円80銭の日当、80銭の飯代で酒を飲むこともできなかった、しかし朝鮮に居ればもっと安かった、当時の日本人の日当は工夫で7~10円、世話人で15円ぐらいもらっていた、朝鮮人は賃金は3分の1しかもらえなくとも仕事は倍もしなくてはならなかった。

昭和10年に平岡に移った、道作りや鉄くず買いをしているうちに昭和14年(1939)からダムの段取り工事が始まった、仕事はモッコ担ぎとトロッコ、トロでは泣かされたものだった、朝4時半起床、朝食の後6時前に出かけて、徹夜組と交替する、昼夜2交替制で夕方は6時まで働く、夜も昼も人でいっぱいであった、夜も飯場からは外出できない、日本人の見張りが一晩中いた、食物は米2合配給、一日に一升3合ぐらい食べなければ力が出ないのに、二合では腹がへって仕事ができない、千切りの大根のはいつているミソ汁も塩味が半分だった、漬物(ナツパ)や時にはマスが付いた時もあった、他にほしければ自分の金で買う、玉子や酒を買えば赤字になって朝鮮への仕送りが出来なくなってしまう。

死んだ朝鮮人も多くいた、病気の人も居たが多くはケガで死んだ、トロッコから落ちるとか、トンネル工事をきりっぱなし(木の防護棒)をしないで作業をやったりしていたので、死者をかついで行くのは何十人、何百人も見つ、温田のトロッコの作業中、スコップの柄が当たって死んだのを直接見たこともある、死ぬと、親方によっては酒代として15~20円くれたが、知らんふりをしている親方もいた、死体は自分たちで焼いたが、木がなくて1人焼くにもえらかった、遺骨は飯場頭がいい人ならお寺へ納骨されたが、なかなかそんな余裕はなかった。死んだ人の家族に知らせたくとも、住所や名前のはっきりわからない人が多くいた、(逃げて来た人が多いから分からない)中国人捕虜の3倍も死んだと思う、全体の人数も2倍以上いたし、期間も長かったから。

逃げ出す者もあとを絶たなかった、逃げ出して捕まると警察に連行され、1週間ぐらいおかれて、親方からも暴行を受けた。

平岡には昭和17年(1942)アメリカ、イギリスなど連合軍の捕虜が、続いて昭和19年(1944)には中国人の捕虜が送り込まれてきた、中国人の捕虜が一番苦勞していた、連合軍の捕虜は今の天竜中学校のグラウンドにあった建物で窓にはガラスが入っていたが、中国人、朝鮮人はうすい板を張り付けただけの建物だった、食物を与えずに仕事をやれと言っても無理だ、焼いたパンみたいなものを3個、おかずは生のニンニク玉だけだった、これで力がでるわけがない、世話やき(監督)たちがステッキみたいな棒をもっていた、たたいたして、いばってしょうがない者もいた。

捕虜たちはなかなか言うことを聞かなかった、冬、川ばたに線路をひくのに玉石を片付けるのを素手でやっていた玉石は持つと氷よりつめたい、一つやっては手をこすっていた、死んだ時は毎日しんだ、全部で80人死んだそうだ、中国人は袋にするような、(麻袋か)粗い目で風がみな通ってしまうようなものを着ていた人もいた。

終戦 「戦争に負けたので日本人はヤケクソになっているから気をつけるように」という連絡が連盟から来たように思う、「仇を返すようなことをすると、いつまでもあとが切れない、一般国民には罪はない、警察や官庁の者がいばったら知らせてほしい」と、だから平岡には暴動のようなことはなかった。

その後兄家族は朝鮮に帰ったが、斗権氏は帰らなかった、先に帰った兄たちも「帰って来い」とは言ってこなかったし、今から思うと帰らなくてよかったと思う。

P190

洪 象寛氏からの聞き取り調査 (1986年8月7日)

洪象寛氏は、1921年(大正十年)生まれ、訪問時65才、下伊那郡高森町に在住し、焼肉屋を経営している、出身は済州島、朝鮮ではいちばん暖かいところだ。

象寛の子供のころは、今のブタよりひどい生活だったと言う、学校なんか全然行ってない、

金が無いから学校へいけない、私等の年代の人がいちばん学校へ行っていないのではないか、兄弟のうち長男だけを学校へやった人もいる、植民地だったからやりにくいこともあると思うが、親の考えもよくなかったのではないか、60件ある部落のうちで小学校へ行っているのが9人だけだった、当時の学校は校長は全部日本人で、警察も部長以上は全員日本人であった、私は学校へ行けなかったが、冬になると村の人が4ヶ月ぐらい夜学をやってくれたのでなんとか字だけは読めるようになった、(当時の学校では日本語を教えていた)当時50~60軒ある部落の半分ぐらいが日本へ来た、まず1人が働きに来ていて、家族を呼んだりするのが多かったとにかく収入より支出が多くて朝鮮ではやっていけなくなってしまっ

いた、南部の人達は日本へ多く来たが、北部の人達は満州へ行った人が多かった、満州には朝鮮人が百万人をこえるといわれている、北部（北朝鮮）から来た人は在日朝鮮人70万人のうちの一割足らずだ、樺太（サハリン）にも朝鮮人が7万人いる。

兄が東京にいたので、勉強をするという理由で15、6才のころ兄をたよって日本へ来た、東京から名古屋へ行き、3年ほどいた後、昭和19年（1944）に木沢（現在の南信濃村木沢）へ来た、隧道の工事をやっており朝鮮人が百人くらいいた、日本人は現場の監督とかコンプレッサーの見まわり程度ではとんどいなかった、其の当時はどんな工事でも朝鮮人がいなければ工事が出来ない状態であった、昭和19年の2月か3月ころ、木沢の掘割の工事場でうしろの山がくずれてきて休んでいた4~5人が生き埋めなって死んだ。

飯島の発電所から木沢の堰堤までの隧道は朝鮮人がみな工事をした、和田の前の隧道を私等がやった、今に比べれば危険な仕事で、1人や2人死んでも関係なかった、穴を掘ったり、ダイナマイトを掛ける仕事。

私ら（自由労働者）は1日の日当が5円だったが、連れてこられた人は賃金が安く日当が3円くらいだった、5円の日当でもお金が残るということはなかった、朝7時に仕事につくと、夜の7時までの12時間労働で、昼夜2交替制だった、1週間して交替する時には朝の7時に入り翌朝7時まで働いて2日休むというやり方だった。

木沢でも逃げ出す人がいた、しかし地理がわからないので逃げ切る人は少なくてつかまることが多かった、つかまえて来て、飯場頭（朝鮮人）に暴行させる、1年足らずの間に何回も見た、逃げ出すのは仕事がきついというより、朝鮮で募集した時の話とちがうので逃げる人が多かったのだと思う、日本人の中にはいい人がいて、にぎり飯をつくって逃げ道を教えて応援してくれた人もいたそうだ、和田、平岡の工事場では、朝鮮人が朝鮮人をいじめる奴が多かった、自分が日本人によく見られたいために、そんなこともあって、終戦後に朝鮮に帰る船の中で、もとの飯場頭の兄弟が海中へ投げ込まれたという話を聞いたこともある。

昭和20年（1945）5月に平岡へ来た、平岡では8月までの3ヶ月間いたが、アメリカ人の捕虜が2百人近くいたのが、1週間たたないうちに死者がでた、コヌカやフスマのおかゆだけで生きていけない、セメントかつぎやレールかつぎなど一番えらい仕事をさせられていた、可愛そうに思ってたご飯をそっと捕虜にやって監督に見つかりひどくおこられたこともあった、食べ物、朝鮮人、中国人、捕虜と3段階に分かれていて朝鮮人は食べ物は配給でくれた、中国人はパン食、捕虜はみじめなもので、生き残った人は20~30人いたかいないかぐらいだった、敗戦後2~3日以内にアメリカ軍が飛行機で食料や物資をもってきた。

そのころ平岡には中国人もいた、中国人より朝鮮人の方が多く、朝鮮人は千人くらいいたように思う、私らのいたころは、平岡ダムの工事が一時中止になって、遠山の発電所（飯島発電所）を早く完成させて電気をおこすという時期であった。

北海道のタコ部屋へ連れていかれた人達は可哀想なものだった、大島（松川町）にいて2、3年で亡くなった洪覚文と言う人は、タコ部屋から逃げ出してきた人だった。

飯田線の工事の話を聞くと大変だったらしい、80才のおじいさんの話では、市田駅の木材会社のところに飯場があって朝鮮人を70~80人収容し石を積んで逃げないように庭をこさえてあったそうだ。

P193

松村 炳治氏からの聞き取り調査（1986年8月11日）

松村炳治氏は1922年（大正11年）生まれ、訪問時63才、平岡在住、昭和15年（1940）ダム工事が始まったころ父親と共に平岡へ来た、父親は現場の総とりしまり世話役をしていた、平岡へ来る前は木曾福島の三岳発電所入り口の隧道工事をしていた。

平岡の工事は熊谷組のもので、発電所はタカシナ、隧道は宮川、堰堤は岩手屋などの名義人がやっていた、募集してきた朝鮮人（そのころは「半島人」とよんでいた）は2年が契約期間で、その後は朝鮮に帰っても日本に残ってもよかった、そのころ日当が1円90銭で飯代が90銭、タバコ、地下足袋、それに一杯の酒を飲むとなくなる程度であった、酒も飲まず始末すれば月に10円くらい稼げた、其のうち5円は強制的に熊谷組に貯金させた（逃亡防止のためか）、2年過ぎると日当もよくなった、それで家族を呼んで飯場で暮らす人もいた、「あかり」とよぶ外での仕事が3円、隧道の仕事は3円50銭くらい、隧道は昼夜2交替で12時間労働で昼休みが45分で一服が15分だった。

ご飯のおかずはうすく切った塩ますが主で、みそ汁には塩を入れていた。

1つの飯場は50人が普通だった、天竜橋の向こう側に飯場が7~8棟あった、家族もちは炊事場と2間ありセメント袋をはったり俵を外へはったりしていた、逃げる者が多く3ヶ月もたてば半分くらいになった、飯場にはツルハシの柄のような棒をもった用心棒が見張っていた、逃げてつかまった者は頭の毛を刈られた後、同邦から暴行された、逃げる人は日本に身内のいる人だったと思う、大崎の軍需工場は逃げ込んでも良い所で日当も高かったので、平岡からも逃げ込んだ人がいた、一日仕事に出ると飯場頭は1人につき10銭もらえた、自由労働だともっともらえた。

昭和18年（1943）アメリカ人やイギリス人の捕虜が入ってきた、5百人ぐらいいたが1年たつと半分くらいになっていた、毎日のように火葬場に運んでいたようだ、最初の捕虜の監視役はとてもきびしい人で終戦後

の裁判で絞首刑となった、次の所長は温厚な人で、戦後アメリカから表彰された。

中国人の捕虜は隊長の今村がひどいことをやった、終戦後に中国人が今村を探しにきたほどだった、後にこの今村はメイコウ建設の下請けをやっていることがある、上条隊の方は奥さんがよく気のきく人で、作業に来る中国人に握り飯をやってよろこばれていたし仕事の能率もよかった。

昭和 18, 19 年になると朝鮮人も半強制で来た人が多かった、そのころ発電所に百五十~二百人、ダムに三百以上、(四百~五百) 合計で千人はいなかったと思うが、七百~八百くらい、もっとも昭和 17 年(1942) までしか平岡にはいなかったのであとのことはわからないが、.....

P195

日本人関係者からの聞き取り調査 (1985年10月10日)

北原悦郎氏飯田市伊賀良在住の元教員で、昭和元年(1926) 生まれ、訪問時 59 才、氏は旧制飯田中学校生徒のころ、勤労働員として、遠山よりさらに上流の木沢の隧道工事に従事した、昭和 19 年(1944) 8 月~12 月までの約 4 ヶ月間で、当時 15~16 才であった、仕事の内容は、河原の砂利をとり、ミキサーでコンクリートをねる仕事であった、「このダムが完成すれば、一日飛行機三台をつくるだけの電力が得られる」と聞かされた、木沢には勤労働員の中学生と朝鮮人の労働者しかなくて、主体は朝鮮人労働者だった、朝鮮人は 20 才から 60 才のお年寄りまでおり、中心は 30 代から 40 代の人達であった、氏が朝鮮語でアランを歌っていたら、朝鮮人の 60 才くらいのお年寄りが寄ってきて、手をとってないで、「あなたは朝鮮人でしょう、でなければ、そんなに上手にうたえるはずがない」と言った。

作業場の責任者は金さんという 40 才くらいの人で、ヤギの肉が好きな人だった。

食事は、どんぶりに 8 分目の盛りつけで、そのうち半分は穀物(米や麦)であとの半分はサツマイモだった、おかずはヒジキや野菜の入っているみそ汁だけだった、4 ヶ月の間満腹したことは一度もなかった、中学生だから本なども持っていったが、勉強する状況ではなかった、食事や起床はラッパで合図するのだが、腹がへって正しい音程はでなかった。

P216

ダム建設などへの強制連行

木曾御岳発電所、上松発電所

1944 年 4 月から翌年にかけて、御岳発電所、上松発電所の工事に 2014 名の中国人が強制連行された、宿舎は隙間だらけの粗末な板張り、衣服は連行時の中国服、ヌカ 40% の小さなパン、昼夜 2 交替の重労働、約一年

間で179名の犠牲者をだした。

鹿島御岳699名(内死亡44) 大成上松299名(内死亡23) 間御岳723名(内死亡92) 飛島御岳293名(内死亡20)であった。

この中国人犠牲者に対しては、1983年、旧長野中学同窓生の発起で慰霊碑が建立されたが役2千人働いていた朝鮮人に対しては、その実態もつかめず、犠牲者への慰霊は全く出来ていない。

平岡ダム 泰阜ダム

1932年着工の泰阜ダムに2千3百人、1939年着工の平岡ダムには2千人の朝鮮人労働者が動員された、また1943年着工の昼神発電所や1944年着工の南信濃村飯島発電所でも多数の朝鮮人が働いていた、平岡発電所内の慰霊碑には、犠牲者として、日本人33名の氏名のあとに「中国人25名、朝鮮人13名」と刻まれているが、熊谷平岡の強制連行中国人1083名中62名が死亡していることが明らかになっている、朝鮮人も中国人の2倍くらいの犠牲者がでていると思われるが、その実態は把握できていない、中国人に対しては平岡ダム東側に「在日殉難中国烈士永垂不朽」と刻まれた碑が建立されている。

1942年満島補慮収容所(正式には東京補慮収容所第12分所)が平岡に設置され、常時2百~3百人が収容されていた、アメリカ、イギリスの兵士中心に東南アジア人、オランダ人、カナダ人だったが、この収容所で46~7人の病死者がでたため、戦後「補慮虐待罪」で所長以下5人がBC級戦犯として絞首刑を執行された。